休館中のイベント情報

まちなか美術講座 2023　宮城県美術館コレクションものがたり

リニューアル休館中の「まちなか美術講座」では、当館の40年以上の歴史の中で収集されてきたコレクションの特徴やつながりについてお話しします。

「夢みたパリ―
宮城県美術館コレクションの中のフランス近代美術」
講師：赤間和美（当館研究員）

［会場］東北工業大学
一番町ロビー２階ホール
［日時］2024年2月3日（土）13：30～15：00
［主催］宮城県美術館・東北工業大学
［定員］50人　※先着順　申込不要
［料金］無料

アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック
《ル・ディヴァン・ジャポネ》1893年
宮城県美術館蔵（三浦コレクション）

宮城県美術館といえば、クレーやカンディンスキーなどドイツ語圏の美術のコレクションで知られますが、この講座では、三浦コレクションのミュシャやロートレックのポスターをはじめ、ルオー、ユトリロ、そして、宮城県出身の画家から佐藤忠良まで、当館のコレクションとフランス近代美術のかかわりに目を向けてみます。

［お問合せ先］
980-0811
仙台市青葉区一番町 1-3-1（TMビル）
TEL：022-723-0538
東北工業大学一番町ロビー
「まちなか美術講座」係

まちなか美術講座 特別事業
「高精細レプリカ美術館」

最新のスキャニング技術を用いて作成した、高精細レプリカによる特別展示事業を開催します。会期中にはギャラリー・トークも行いますので、ぜひ足をお運びください。

［会場］東北工業大学一番町ロビー
1Fギャラリー
［日時］2024年2月9日（金）～20日（火）
※会期中無休
10：00～17：30
（最終日のみ16：00まで）
［主催］宮城県美術館
［協力］東北工業大学　［料金］無料

【関連事業】
ギャラリー・トーク
「高精細データで発見！絵画の秘密」
講師：加野恵子（当館学芸部長）
日時：2月10日（土）
13：30～（45分程度）
定員：30人（先着順）

所蔵作品ここで！

下記の展覧会で宮城県美術館の所蔵作品をご覧いただけます。※展覧会の詳細は各会場にお問い合わせください。

展覧会名	会場・会期	出品される当館所蔵作品
「芥川龍之介と美の世界 二人の先達―夏目漱石、菅虎雄」	久留米市美術館　2023年10月28日（土）～2024年1月28日（日） 神奈川県立近代美術館 葉山　2024年2月10日（土）～4月7日（日）	カンディンスキー《響き》
「春陽会誕生100年 それぞれの闘い 岸田劉生、中川一政から岡鹿之助へ」	栃木県立美術館　2024年1月13日(土)～3月3日(日) 長野県立美術館　2024年3月16日(土)～5月12日(日)	木村荘八《お七櫓に登る》
「『シュルレアリスム宣言』100年 シュルレアリスムと日本」	京都府京都文化博物館　2023年 12月16日（土）～2024年2月4日（日） 板橋区立美術館　2024年3月2日（土）～4月14日（日）	靉光《作品》、矢崎博信《時雨と猿》、 吉井忠《二つの営力・死と生と》

所蔵作品による展覧会が行われました

当館の所蔵作品を活用した展覧会「宮城県美術館所蔵　絵本原画の世界2022-23」（10月7日～12月10日）が、三重県立美術館で開催されました。絵本原画など350点以上を展示し、12月10日に無事閉幕した本展では、多くの方に当館の絵本原画コレクションの魅力をお伝えできたことと思います。今後も県内外において、所蔵作品をご覧いただく機会を作っていきます。

会場風景（提供：三重県立美術館）

休館中の当館の情報については、WEBサイトも併せてご覧ください　https://www.pref.miyagi.jp/site/mmoa/

宮城県美術館ニュース（休館中限定号）
Vol.2　発行日／2023年12月20日

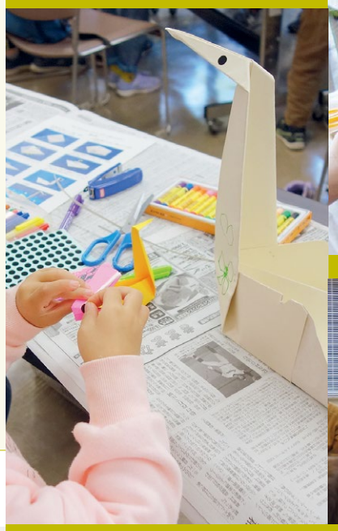
宮城県美術館
〒980-0861 仙台市青葉区川内元支倉34-1　電話番号：022-221-2111
メール：bijutu@pref.miyagi.lg.jp　ファックス：022-221-2115

宮城県美術館ニュース

休館中限定号
Vol.2

2023年12月20日発行

RENEWAL NEWSLETTER



宮城県美術館はリニューアル工事のためただいま休館中です。

教育普及事業が出張中！

出張創作室

●7月29日（土）　大衡村ふるさと美術館
●10月28日（土）　伊豆沼・内沼サンクチュアリセンター
●12月17日（日）　角田市市民センター（かくだ田園ホール）

大衡村ふるさと美術館での子ども向けのプログラムでは、「ぴかぴか」「がたがた」などのオノマトペ（擬音・擬態語）を使って施設周辺で自然観察をした後、その言葉から連想する形を切り出してオノマトペの妖精を作りました。その妖精を使って自然の中で動画を撮影し、施設の展示室で発表しました。

オノマトペ妖精を作成中

大人向けのワークショップでは、当館の収蔵作家であり、大衡村ふるさと美術館で常設展示されている画家・菅野廉の風景の捉え方や描き方を参考にして、「色で風景を分解する」など、いつもと異なる風景を発見するワークショップを行いました。

風景を5色で分けてみる

伊豆沼・内沼サンクチュアリセンターでは、渡り鳥の生息地である特性をいかし、子ども向けのプログラムでは、“こんな鳥が来てくれたらいいな”という想像を基にしてオリジナルの“サンクチュアリ・バード”を大きな折り紙で作り、施設に飾りました。

大人向けのワークショップでは、水生植物園の周辺で聞こえる様々な音をモチーフに、音とモノとを置き換える活動を行いました。

（教育普及部　郷泰典、細萱航平）

完成したサンクチュアリ・バード

沼の音をホースと洗濯ばさみに置き換え

オープンアトリエの様子

当館には開館中いつでも誰もが使える「創作室」があります。リニューアル休館中は、この創作室の活動を「出張創作室」と称し、その機能や特性を館外の生涯学習施設に持ち出し、子ども向けのプログラムや大人向けのワークショップを行っています。また、美術館から画材や木材などの材料を施設に持ち込んでオープンアトリエを設え、創作活動ができる場も用意しています。

アーティストを講師に迎えた子ども向けのプログラム「出張キッズ・プログラム」では、山や海にくりだして創作活動を行いました。今号では、それらの様子をお伝えします。

出張キッズ・プログラム

講師：さくまいずみ（アーティスト）
●9月17日（日）
「山であそぶ日」（蔵王自然の家）
●10月7日（土）
「海であそぶ日」（志津川自然の家）

さくまさん（中央）と一緒に観察中

集めた素材でオブジェ作り

アーティストのさくまいずみさんを講師に招き、普段あまり扱うことがない「山」や「海」をそれぞれテーマにして、子ども向けのプログラムを行いました。

蔵王自然の家では、「山であそぶ日」と題して、身体で自然を感じながら広場から林までを散策し、葉や枝、石、木の実など気になる素材を拾い集め、それらを組み合わせてオブジェを作成しました。

感覚を研ぎ澄ませて海まで歩く

海をつくる

志津川自然の家では、「海であそぶ日」と題して、海岸までの道すがら海の音やにおいを感じながら散策しました。海岸では石を積み上げたり海を描いたりするなどの遊びをしました。その後、施設までの帰り道、木の葉なども拾い集めました。施設に戻ってからは画用紙に海の色を塗り、集めた素材を貼り付けて「海をつくる」活動を行いました。

（教育普及部　郷泰典、関口詩乃）

参加者からは、「親子で創作することはあまりないので、貴重な体験でした」「様々な材料が使えて、子どもたちは楽しんでいたようです」「自然の中で工作できる得難い経験をさせていただきました」などの感想が寄せられました。

収蔵庫を空にせよ！作品たちの引っ越し

美術品の「住まい」とも言える収蔵庫。リニューアルでは本館収蔵庫内の工事も行うため、収蔵品を適切な環境の保管場所に移す必要があります。そこで、長期休館に入って間もないこの夏、全作品を運び出す「引っ越し」を行いました。

美術品の移動は、事故や破損のリスクと隣り合わせです。それぞれの材質や形状、大きさを考慮しながら、専用の台車で慎重に運搬。移動先ではしっかりと固定して、地震の際などの安全性を確保。日頃から気の抜けない作業ですが、今回は何千点もの作品を動かす大仕事が、約2か月間続きました。ハイライトは、田窪恭治《室内―イメージの原形として》の運搬。サイズ・重量ともに当館最大級のこの作品をいかに運ぶか、入念な検討の末、特製の格子状のケースに収めることで、無事に移動することができました。

運搬準備の様子

移動先に収められた作品たち

1点ごとに運び方や収め方を検討する作業は、コレクションの隅々にまで考えを巡らす良い機会になりました。リニューアルにより新収蔵庫の設置が予定されており、今後の展示や収集に向けて、収納計画がとても重要になります。仮住まいから新居への次なる「引っ越し」に向けて、間取り図とのにらめっこがこれから始まります。

（学芸部　小檜山祐幹）

美術館の仕事

屋外彫刻のメンテナンス

宮城県美術館には屋外に24点の彫刻が設置されています。ヘンリー・ムーアの《スピンドル・ピース》やダニ・カラヴァンの《マアヤン》のある前庭、新宮晋の《時の旅人》等のある北庭に加えて、本館と佐藤忠良記念館の間にあるアリスの庭では、子どもや動物をモチーフにした彫刻に親しむことができます。

こうした屋外彫刻は経年によって汚損や劣化が進行するため、修復家の方にお願いして、1年に数点ずつ専門的なメンテナンスを行っています。今年度は、舟越保武の《原の城》、バリー・フラナガンの《野兎と鉄兜》の洗浄と保護剤（ワックス）の塗布を行いました。作品を守る仕事は休館中もコツコツと続いています。

（学芸部　赤間和美）

コレクション・コラム

高橋由一《宮城県庁門前図》

1881（明治14）年　61.1×122.0cm　綿布，油彩　宮城県指定有形文化財

歴史を感じさせる立派な建物と、その門へと向かって走る馬車。馬車の中には人の気配も感じます。門柱には「宮城縣廳（宮城県庁）」の表札が掛けられ、描かれているのが仙台藩の藩校を転用した当時の県庁であると分かります。明治時代の宮城県を語る際には必ず紹介されるこの油彩画は、県の歴史にとって重要な記録でもあるのです。

作者は日本洋画の父とも呼ばれた高橋由一。あの有名な「鮭」の絵の画家と言えばお分かりになるでしょうか。本作は由一が仙台を訪れた際に県から依頼され、東京に戻った後に描き上げて納められました。仙台滞在中に実際の景色を目にしている由一ですが、制作には写真を参考にしたとも考えられています。同じ構図の古写真がどこかに残っているかもしれませんね。

（学芸部　土生和彦）

※この作品は、令和4年度に高精細デジタル記録を行ったもののひとつです。当館のWEBサイトで拡大画像をご覧いただけます。